

真実は生データの中に

松浦 俊博

メディアのニュースは事実情報を集めて報道するはずだが、真偽が明瞭でないことも多いし、どうしても記者の偏見が含まれる。大事なことについては、ニュースをそのまま鵜呑みにしないで、情報群から事実を読み取る努力が必要だ。

現役時代タービンの設計や開発に携わり、しばしば運転中のタービン翼振動を計測した。分析機が処理した周波数スペクトルなどを表示するので、それを整理すれば結果を纏められなくはないが、私は試験中には必ず20チャンネル程度の振動波形の生データを見ていた。これにより、ノイズの状態やオーバーロードなどの計測異常がないかを即時チェックして、再試験の要否を判断した。また、振動波形の様相が変わると、なぜそうなったかを考えていた。元データそのものに欠陥がある場合や、正しいが低レベルのデータとノイズの区別ができない場合もある。料理されたデータに頼らず、生データをきちんと見ないと判断を誤る。

このようなことを繰り返すと、振動に関する「勘」が働くようになる。若手の技術者が担当する試験に立ち会った時のことだが、彼が周波数スペクトルを見て、「予測した現象が現れない。失敗です」とあきらめようとした。生データにノイズが少ないことを見ていた私は、低レベルの周波数成分を指さして「これがその現象ではないのか」と言った。彼の顔色が変わり、試験が失敗でなかったことに気づいてくれた。やはり「勘」は技術者にとって重要な要素である。

では、日常生活でのメディアニュースはどのように捉えればいいのか。ニュースの製作者自身が生データをちゃんと見て偏見の少ない報道をしてくれればいいが、彼らを全面的に信頼することはできない。情報を受け取る側が、できるだけ多くの生データに近づき集めることが必要だ。更に、報道のコメントなどは料理された信頼性の低いデータだから、自分自身で考えてみる必要がある。

情報が溢れ面倒な時代になってしまった。大切な事だけは、自分で生データを集めて状況を判断するしかない。